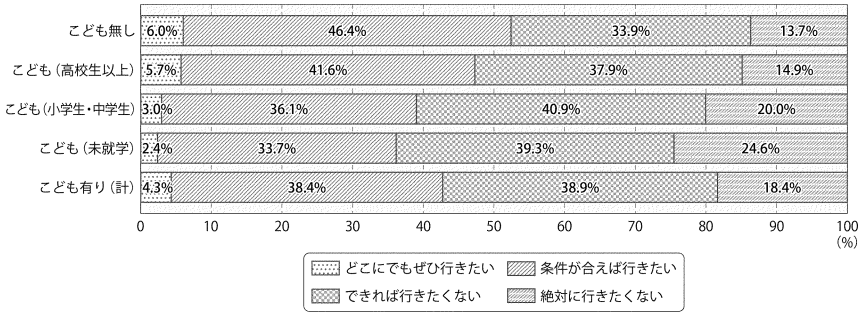
図2-15　こどもの状況別の転勤に対する意識

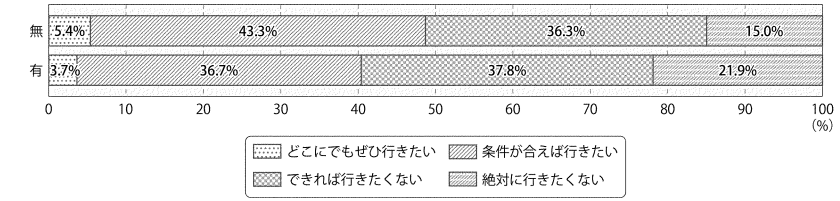


「どこにでもぜひ行きたい」又は「条件が合えば行きたい」という転勤に肯定的な意識を持っている職員の割合は、こどもがいない場合には５割強となっており、「できれば行きたくない」又は「絶対に行きたくない」という転勤に否定的な意識を持っている職員の割合は５割弱となっている。

こどもが幼いほど転勤に否定的な意識を持っていることがうかがわれ、未就学又は小学生・中学生のこどもがいる場合は、転勤に否定的な意識を持っている職員の割合は６割を超えている。

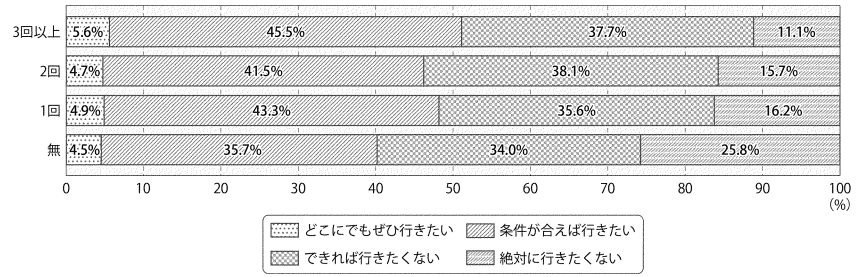
また、「絶対に行きたくない」との意識を持っている職員の割合は、未就学のこどもがいる場合は２割を超えており、小学生・中学生のこどもがいる場合は２割程度となっている。一方、高校生以上のこどもがいる場合は、転勤に肯定的な意識を持っている職員の割合は５割弱となっている。

図2-16　介護が必要な親族の有無別の転勤に対する意識



介護が必要な親族がいる場合、「できれば行きたくない」又は「絶対に行きたくない」という転勤に否定的な意識を持っている職員の割合は６割近くとなっており、「絶対に行きたくない」との意識を持っている職員の割合は２割を超えている。

図2-17　転勤の経験回数別による転勤に対する意識



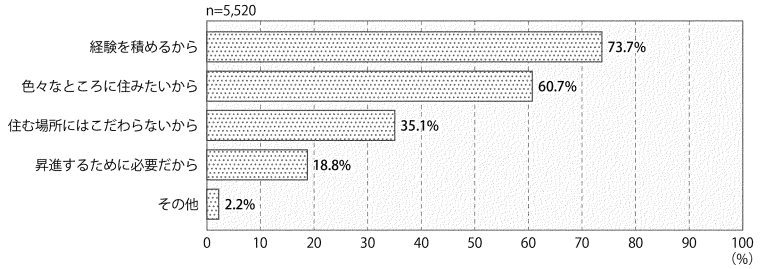
これまでの転勤の経験回数が３回以上である場合、「どこにでもぜひ行きたい」又は「条件が合えば行きたい」という転勤に肯定的な意識を持っている職員の割合と、「できれば行きたくない」又は「絶対に行きたくない」という転勤に否定的な意識を持っている職員の割合とが拮抗している。

これまで転勤を経験したことがない場合、転勤に否定的な意識を持っている職員の割合は６割近くとなっており、「絶対に行きたくない」との意識を持っている職員の割合は２割を超えている。

⑵　転勤をしたくない理由、転勤してもよい条件等

転勤に対する意識について冒頭の全員必須の質問（図２―10）について、それぞれの選択肢を選んだ理由等を把握するための質問を行ったところ、以下のとおりとなった。

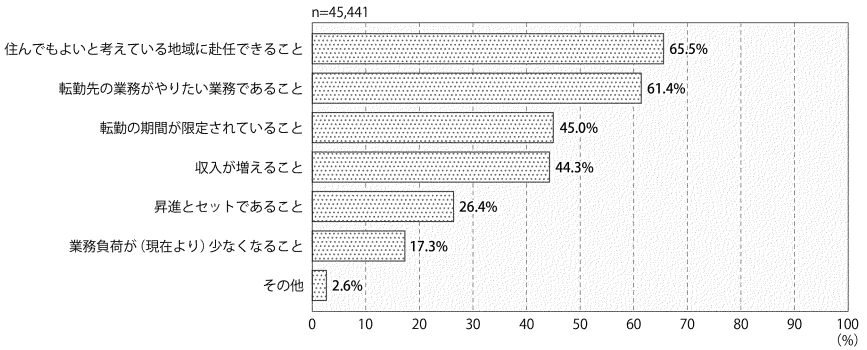
図2-18　「どこにでもぜひ行きたい」理由（「どこにでもぜひ行きたい」を選んだ者への質問）



「どこにでもぜひ行きたい」を選んだ者について、その理由を質問（複数回答可）したところ、７割を超える者が「経験を積めるから」を挙げ、６割を超える者が「色々なところに住みたいから」を挙げている。

なお、自由記述の中には、公務の要請を理由として挙げているものも一定数見られた。

図2-19　転勤してもよい条件（「条件が合えば行きたい」を選んだ者への質問）



「条件が合えば行きたい」を選んだ者について、転勤してもよい条件を質問（複数回答可）したところ、６割を超える者が「住んでもよいと考えている地域に赴任できること」、「転勤先の業務がやりたい業務であること」を挙げ、４割を超える者が「転勤の期間が限定されていること」、「収入が増えること」を挙げていた。

職員が転勤をする上で、転勤先（地域）や転勤先での業務が選択できることは大きなインセンティブとなり、また、転勤の期間の限定や収入の増加も一定程度のインセンティブとなり得ることがうかがえる。